

<翻 訳>

# 会議「希望の未来」のオープニングに おけるヴァーツラフ・ハヴェル・ チェコ共和国大統領のスピーチ

矢田部 順 二 訳

1995年12月5日，広島・日本

ご列席の皆様，

この会議は希望をテーマにしています。死を考えずにはいられない街，広島で開催されています。そこで，「希望と死」というテーマで，少しお話しさせていただきます。

====

きわめて個人的な話から始めたいと思います。

私は自分の人生のなかで何度も，それは刑務所のなかでいたときだけでなく，すべてが私に対して陰謀を企てているかのような状況に陥りました。自分の願いが叶ったり，私がやったことが何一つ成功しそうになく，自分がやっていることに何か意味があるという目に見える雰囲気がないときです。それは私たち誰もがよく知っている状況であり，つまり，自分にも周りにも良いことがないと思える状況です。このような状況は通常，「絶望的」と言われます。

このような悲しい気持ちに浸りながら，私は何度も何度も，自分自身に

素朴な質問を投げかけました。「なぜ私はあきらめてすべて投げ出さないのか？」あるいはより根源的に、「自分の人生には明らかに意味がないのに、なぜ自分はまだここに居続けるのか？」「自分自身の苦しみだけでなく、防ぎようのない他人の苦しみを目の当たりにする人生に何の意味があるのか？」と。

そのたびに、私は、深い意味での希望とは、外からやってくるものでも、あれもこれももうまくいくという兆しを周囲に求めるものでもなく、逆に、何もうまくいかないことが明らかであれば、希望をもつ理由はないことに、最後に気づくのでした。希望とは何よりも心の状態であり、周囲の状況に左右されることなく、希望をもっているかもっていないかだけであることに気づきました。希望とは、将来を予言することとは関係ない、単に実存的な現象なのです。すべてが真っ黒な色で覆われたかに見えたとしても、不思議なことに私たちは希望を失うことはありません。逆にすべてが満足のように進むように見えても、同じく不思議なことに私たちは突然希望を失うのです。明らかにこのような意味での希望は、「希望がある限り、生きる理由がある」という人生の意味そのものに関係していると言えます。私たちが希望を失った場合、選択肢は2つしかありません。自分の命を絶つか、ただ単に生き延び、みじめに生きる、すなわちたまたまこの世にただだけでこの世にとどまるかという、より一般的な道を選ぶかなのです。

もちろん、希望とは、通常、何かに、あるいは何かのために望むことです。例えば、私は囚人として、誰かが私の投獄の意味をいつか理解し、刑務所で私の受けたすべての苦しみが何か良いものになり、おそらく何らかの価値観を強化してくれるのではないかと願うかもしれません。あるいは、大統領として、複雑な政治的交渉が成功して、よくやったと振り返ることができるようにと願うこともできます。しかし、希望が何か特定の

矢田部：会議「希望の未来」のオープニングにおけるヴァーツラフ・ハヴェル・チェコ共和国大統領のスピーチ

のに対する望みであるかもしれないという事実は、私が先に述べたこと、すなわち、その深い本質は、私たちをすぐに取り囲む世界から来るものではないということと何ら変わりはありません。希望の真の源は、何らかの方法で必ずそれを目覚めさせたり、動かしたりする対象ではなく、それと同様に希望を失う最も深い原因は、永久にわれわれから希望を奪う一連の外的状況でもありません。つまり、物事がうまくいってれば楽しいし、うまくいってなければ気分が悪くなるというような、表面的な心理状態のレベルの話ならそうかもしれません。しかし、私がここで理解している実存的な意味での希望そのものは、その具体的な対象から生命力を引き出すものではありません。むしろその逆で、希望は対象を生き生きとさせ、そこに生命を吹き込み、ある方法で対象を照らすのです。

しかし、希望が単なる外界の派生物ではないとしたら、それは実際、人間のどこから来るのでしょうか。

====

私は何千回もこのことについて考え、何千回もこの観点から自分自身を吟味してきました。そして私はいつも、ある人には喜ばれ、ある人には驚かれながらも、希望の起源は簡単に言えば形而上学的なものであるという確信を持っています。私が言いたいのは、単に遺伝的、生物学的、化学的、文化的、その他の方法で決定された楽観的な傾向や心の状態よりも、もっと多くの、もっと深いものだということです。育った環境や文化的背景、体内の特定の化合物の存在など、これらすべてが世界との関係や行動に影響を与えるのは当然です。しかし、それだけでは完全には説明できません。その背後には、人間が自分自身の存在や世界の存在について、認められているか、認められていないか、あるいはさまざまに表現されているが、つねに非常に深遠な経験があるのです。

そして、ここで「死」というテーマにたどり着きます。

人間は、自分が死ぬことを知っていると確実に言える唯一の存在と思われれます。死は、戦争やテロリストの虐殺、自動車事故など、テレビのニュースで見ると奇妙なできごとだけではありません。それどころか、それはあらゆる場面で私たちに付きまといまいます。最も近親な人が亡くなり、病気になるたびに、飛行機に乗るたびに、車で疾走するたびに思い起こされ、日常の行動のなかにも存在します。交差点の歩行者として、青信号を待っているときでさえ、死から逃れるために待つのです。自己保存の本能は、すべての生物に当てはまります。しかし、それを完全に認識しているのは人間だけのようです。そして、ジグザグに走っても、青信号を誠実に待っても、とどのつまり何の役にも立たず、どうせ死んでしまうのだから、と知っているのは人間だけなのです。

しかし、もし自分が死ぬことがわかっていて、すべてが無駄だとわかっているなら、なぜ生きているのか、なぜ努力しているのか。それだけではなく、私たちが努力したり、人生に意味を与えたりする本質的なもののほとんどが、明らかに人生の地平を超えているのはなぜでしょうか。今のところ何の苦痛もないという気持ちの良さ、明後日には楽しみにしている面白い人たちに会えること、私の考察に興味を持ってくれることなど、これらはすべて、死をすぐには考えていないこと、忘れていること、あるいは単に認めていないことによって、ある程度説明がつけます。しかし、私が言っているような根本的で深い意味での希望は、このような背景では理解できません。深い意味での希望は、その性質上、私たちの死を超えるものだからです。しかも、自分が死ぬことを知っているなかでは、理解できないし、不条理です。私たちが、自分の死がすべての最終的な終わりであると確信しているならば、自分の人生の意味を信じ、永続的な心の状態として希望を抱くことはできません。

本当の希望を説明できる唯一のものは、何百回も否定されたり、認識されなかったりしながらも、人類が深く、本質的に原初的な確信をもっていることです。地球上での私たちの人生は、完璧に過ぎ去ってしまう何十億もの他のランダムな宇宙の出来事のなかの、ただのランダムな出来事ではないということなのです。しかし、それは、すべてのものにかけてがない場所があり、その観点からは、一度起こったことをもとに戻すことはできず、すべてのものが何らかの神秘的な方法で永久に刻まれ、価値を与えられている、偉大で神秘的な存在の秩序の不可欠な部分またはつながりであるということです（それがどんなに微細な次元であっても）。そう、希望という同じくらい不思議な現象を説明できるのは、無限と永遠という反射的または直感的な次元だけなのです。

この考察を聞いて、かなり行きすぎだと思う人もいるかもしれませんが、私はそう思わざるを得ないのです。私は、個人的な苦い運命を心から受け入れた例や、自分の行いから手短で目に見える成功に関しての打算を乗り越えるような善良で勇気のある行動の例を一つも知りません。これは、自分の上のどこかに、自分の周囲ではすぐには理解できない、したがって自分の地上での満足を超越した意義をもつ行為や運命が記録されているという、深く埋もれた確信があってはじめて説明できることです。

少し大げさに言えば、死、あるいは死を意識することは、人間のこの世での滞りのなかで最も奇妙な次元であり、恐怖や恐れ、恐れを呼び起こすものですが、同時に人間の人生を最高の意味で充実させるための一種の鍵でもあるのです。それは、人間の精神を試すために、そして人間が自分の主張する創造の奇跡に真になれるようにするために、人間の精神の道に置かれるダムであり、それを克服することを可能にするからです。その存在を認めないのではなく、死の果てまで見通す力、あるいはそれにもかかわらず意識的に行動する力によって、それを克服します。

超越的な体験がなければ、希望も人間の責任も意味のないものになってしまう。

====

皆さん、

今日私たちは、歴史上初めて単一の人類文明に囲まれた惑星に住んでいます。何十億もの人々と何百もの国の運命は、今日、この地球文明によって、一つの運命に融合するほど相互に結びついています。千の長所と千の短所があります。最大の欠点は、今日の世界ではあらゆる脅威がグローバルな脅威となることです。今日の文明が直面すべきでありながら、ほとんどの人が直面できていない脅威の数と種類について、今さら長々とお話しする必要はないでしょう。そこで、かつて「文明の衝突」と呼ばれた脅威の一つだけを紹介します。

私たちは一つの地球文明の環境のなかで生きてると確信しているので、文明の衝突というよりも、この脅威を文明圏や文化間、宗教間の対立と呼びたいと思います。しかし、このような対立が将来的に切迫している事実を否定できません。私たちが一つの文明の枠組みに緊密に結びつけばつくほど、ある程度まで私たちの生活を一体化させているその成果を好意的にあるいは強制的に受け入れなければならなくなればなるほど、私たちの多様な文化的・宗教的伝統がよりはっきりと息を吹き返し、異なる文明圏がそれぞれの独自性をより強力に守るようになるようです。文明の均質化の過程は、それゆえに、矛盾した過程、すなわち、異なる文化的アイデンティティの自己防衛を強める過程を伴っています。

この脅威にどう立ち向かうか。私たちの孫たちが、50年後に記念すべき第二次世界大戦の100倍もの恐ろしい出来事を目の当たりにし、おそらく新たなヒロシマを目の当たりにするという危険を回避するためには、どのよ

矢田部：会議「希望の未来」のオープニングにおけるヴァーツラフ・ハヴェル・チェコ共和国大統領のスピーチ

うな世界秩序，どのような世界協力のシステムを構築すべきでしょうか。

今日，多くの賢明な人々がこの方向に向けておこなっているすべての努力，そしてこの脅威や人類に迫る他のすべての脅威を回避することを目的としたすべてのプロジェクトやビジョンの重要性を過小評価することなく，私はここで，さまざまな機会にたびたび言及してきたある要素を強調したいと思います。この要素は，私がつとくに重要だと考えているもので，希望と死というテーマでここで述べたことに直接関連しています。

===

自分が死ぬことを知りながら，死なないかのように振る舞うことができるような，自分自身や投げ込まれた世界に対する人間の原型的な経験を調べてみると，それが何らかの形ですべての宗教の基礎に存在していることがわかります。あるいは，人間の権威よりも高い権威を信じ，人間が創り出す地上の秩序よりも高い秩序が存在すると信じるのが特徴ではないでしょうか。それらの宗教もまた，地上の正義よりも高い正義の考えを知っているのではないのでしょうか。それらはすべて，明示的にせよ暗黙的にせよ，私が話した形而上学的な意味での希望に基づいているのではないかと思います。それらの宗教は皆，何らかの形で，人間の最後の尺度として無限と永遠を知り，私たちの視線を死の限界の先に向けているのではないのでしょうか。また，意味のある人生への道標として私たちに提供する一連の道徳的な命令は，私たちを超越するものに対するこの謙虚さから得られるのではないのでしょうか。

今日の文明を構成する多様な宗教的・文化的世界を結びつけるものがあるとすれば，それは，人間が良好に共存し，地獄ではない人生を送るための鍵は，人間を無限に超越したものへの敬意にあるという彼らの確固たる確信であり，私自身が「存在の奇跡」と呼ぶものであると，私は確信して

います。本当の善，本当の責任，本当の正義，本当の意味は，私たちの一時的な地上の計算の世界よりも深いところに根ざしています。これは，結局のところ，人間の宗教心の底にあるメッセージです。

このような状況下で，なぜ異なる宗教性が人類を運命的に分断することになるのか。意識的な存在としての人間のある種の原型的な経験から成長しているさまざまな宗教の精神的な根源は，人類に共通するもの，それゆえに人類を統合しうるものではないでしょうか。

私は世界中のどの宗教も信じていません。確かに，人類を救い，自分自身と世界に対する責任を回復するためには，宗教性の復活だけが必要なのか，あるいは宗教心までの復活が必要なのかもわかりません。それは，人間の基本的な，いわば根源的な精神的体験を再理解し，再構成し，その精神を新しい世界秩序の創造に注ぎ込む必要がある，ということです。その世界秩序というのは，自分の文化的独自性を手放すことなく，平和的に隣人同士共存し協力することを可能とするものです。これまで以上に，私たちが分断するものではなく，私たちが結びつけるものを明らかにし，名付ける必要があるという話です。ここに，来たるべき世紀とミレニアムの最大の課題があると思います。

「文明の衝突」という脅威を回避するためには，おそらくこれが最善の方法であるということだけではありません。それ以上に，人口爆発の結果から生態系の脅威，貧富の差の拡大など，人類が将来直面する他の危険を回避することができる，超個人的な責任感を目覚めさせたり，回復させたりする唯一の方法でもあるでしょう。

つまり，人類が良い未来への希望をもつとすれば，それは何よりも，共通の責任に目覚めることにあります。その責任の根源は，一過性の一時的



矢田部：会議「希望の未来」のオープニングにおけるヴァーツラフ・ハヴェル・チェコ共和国大統領のスピーチ

な地上の利害関係の世界よりも計り知れないほど深いものです。

====

ご覧のように、私はその後、ある対象物に希望を託しました。その対象は、否定できない、さらに間違いなく普遍的な人間の自己意識の根源となるものです。世界がこの事実によって示された道を歩むかどうかはわかりません。

しかし、私は希望を失いません。

「希望の未来賞」をいただくという栄誉と、本日この場でご挨拶する機会を与えてくださったことに感謝します。

### 【解説】

この文章は、ヴァーツラフ・ハヴェル（Václav Havel, 1936-2011）チェコ共和国大統領が、広島で開催された国際会議においておこなったオープニング・スピーチ（Projev prezidenta republiky Václava Havla při zahájení konference “Budoucnost naděje”）をチェコ語から翻訳したものである<sup>1)</sup>。

現在チェコにはハヴェルに関わるすべての業績・関連資料を統括・収集する公益財団ヴァーツラフ・ハヴェル・ライブラリー（Knihovna Václava Havla）が存在するが<sup>2)</sup>、ここではその図書館に所蔵されている文書を底本として訳出した。

ハヴェルのこのオープニング・スピーチは、1995年12月5日に広島国際

---

1) 資料番号：ẽ.1044-1

2) 設立は2004年7月26日。資料収集のみならず、デジタル化による公開をおこなっており、各種イベントやシンポジウム、出版事業や映像資料の普及にも力を入れている。

会議場で開催された国際会議「希望の未来」の基調講演としておこなわれた。この会議において、ハヴェルには「希望の未来賞」が授与されたが、このスピーチは受賞の挨拶として話されたものである<sup>3)</sup>。

ちなみに国際会議「希望の未来」は、第二次世界大戦終結から50年、また冷戦の終結から数年、世界に紛争や民族対立などが続発する状況において、次世代に何を伝えるべきかをテーマに、「希望の未来」「過去からの教訓」を世界の知性たち約50名が議論する場として企画された。米国の作家であるエリ・ヴィーゼル (Elie Wiesel, 1928-2016)<sup>4)</sup> による「ヴィーゼル財団」と日本の朝日新聞社が共催し、開催された。

12月4日には東京の国連大学において国際シンポジウムが開催され、翌12月5日から8日までは、広島において本会議がおこなわれた。広島の地が会議の場として選ばれたのは、冷戦後も核の拡散がやまず、人類史上初の被爆地である「ヒロシマ」の意味が重視されたためであった。日本人では1981年のノーベル化学賞受賞である福井謙一、1994年のノーベル文学賞受賞者の大江健三郎がパネリストとして参加した<sup>5)</sup>。

ここでハヴェルの略歴をふり返っておこう。

ハヴェルはプラハで1936年、有名な資産家一家の子どもとして生まれた。1948年にチェコスロヴァキアが共産主義化すると、ハヴェルの家はブルジョワジーとして資産を没収され、ハヴェル自身も働きながら夜間学校で勉強する日々が続いた。大学進学の際もブルジョワ的出自を理由に人文系学部への志望は却下され、工科系大学に進まざるを得なかった。転学希望をするものの認められず、それどころか退学処分には遭った。兵役を終え、

---

3) 『朝日新聞』1995年12月6日。

4) ヴィーゼルは、ハンガリー系ユダヤ人で、ナチス・ドイツ支配下に強制収容所に送られ、生還した経験をもつ。戦後、フランスで学び、ジャーナリストとして活動するなかで米国へ渡った。1963年に米国の市民権を得て、ホロコーストの史実など暴力や差別を告発する書を書き続けた。このためヴィーゼル自身も1986年のノーベル平和賞を受賞した。

5) 『朝日新聞』1995年12月6日。

矢田部：会議「希望の未来」のオープニングにおけるヴァーツラフ・ハヴェル・チェコ共和国大統領のスピーチ

ハヴェルは演劇関係の仕事に就いた。1960年代に入ると脚本執筆もおこなうようになり、1963年に発表した戯曲『ガーデン・パーティー』は高く評価された。1960年代、チェコスロヴァキアの社会主義体制では改革運動が進展し、これは1968年の「プラハの春」に結実したが、このような自由化の影響下、ハヴェルは劇作家活動を本格化させ、共産主義体制の欺瞞を批判する作品を多く書いた。

しかし、「プラハの春」の自由化運動がワルシャワ条約機構軍の侵攻によりあっけなく潰えると、「正常化」の名の下にハヴェルの作品は上演を禁じられ、ハヴェル自身も当局から危険視されることになった。こうした当局からの抑圧に対し、ハヴェルは1975年には当時の大統領に宛てた形の批判文「グスタフ・フサークへの手紙」を公表し、さらに1977年には人権状況の改善を求める「憲章77」の署名者となった。このような抵抗活動の結果、70年代以降、ハヴェルは当局の監視下におかれ、幾度も逮捕・拘禁された。

1989年、社会主義諸国の体制変動がチェコスロヴァキアにも波及すると、11月にハヴェルは他の反体制活動家らとともに「市民フォーラム」を結成し、この国の民主化、自由化をリードした。チェコスロヴァキアの共産党政権は崩壊し、権力の移譲がスムーズに進んだことから、チェコスロヴァキアの体制転換は「ビロード革命」と呼ばれた。そして、同年12月30日、ハヴェルはこの国の第10代大統領に選出された。

1990年、自由選挙後の新体制でハヴェルは文字通り国家指導者となった。さらに1993年のチェコスロヴァキアの分裂後は、チェコ共和国初代大統領となり、2期10年の任期を務めた。引退後の2011年、肺ガンのために75歳で亡くなった。

このように、ハヴェルは波瀾万丈の人生を歩んだ人だった。このスピーチのなかでもハヴェルは、囚人としての自分や政治家としての自分に触れているが、大統領となってからも国民に媚びるのではなく、信念を貫き、ときに国民のモラル低下を叱咤することもあったため、支持のみならず、批判に晒されることもあった。

最後に、このスピーチについて述べておく。

このスピーチ自体は5500語弱とそれほど長いものではない。ハヴェルは、自らの個人的な経験をもとに希望の意味を捉え直すことからスピーチを始める。そして人間のみがいつか死ぬことを知る生命体であるという事実から、死に向き合う方法を指摘した。その上でハヴェルは、冷戦後の世界が歴史上初めて、人類が一つになる可能性をもちながら、文明の対立という問題に直面していることに触れ、宗教圏や文化圏を超越するためには、個を超えた新たな精神によって隣人と平和共存し、協力し合える秩序の構築が未来に希望をつなぐために必要だと訴えている。しかし2001年以降の世界の動向を見れば、現実社会は宗教や文化の対立を克服できていない。ハヴェルの指摘は今も正鵠を射ているのではないか。

このスピーチは、翌年の1996年には1995年版演説集に所収され<sup>6)</sup>、さらに1999年には著作集第7巻にも収められた<sup>7)</sup>。加えて、1989年から1996年の主要な7つの演説をまとめた選集にも選ばれている<sup>8)</sup>。このほか、リトアニア語(1997年)、英語(1997年)、クロアチア語(2000年)、ポーランド語(2012年)、韓国語(2016年)、ドイツ語(2018年)と、計6カ国語に翻訳されている<sup>9)</sup>。これらの事実からも、このスピーチがハヴェルの業績のなかでも高く評価されるものであることが推測されよう。

ハヴェルが使う「言葉」は、日本の政治家が使う言葉とは異なり、難解で哲学的と評される。また、言い換えや問いかけが多用され、ハヴェル自身もためらいながら言葉を紡いでいると言われる。その点で、短いスピーチ原稿とはいえ、訳出作業では原文の趣旨を崩さず、いかに自然な日本語

---

6) Václav Havel, *95 Litomyšl / Praha: Paseka*, 1996, s. 175–181.

7) Václav Havel, *Spisy VII. Projevy a jiné texty z let 1992–1999*. Praha : Torst, 1999, s. 537–546.

8) Václav Havel, *Sedm úvah. Projevy z let 1989–1996*. Praha : Bonaventura, 2000, s. 73–83.

9) Bibliografie děl Václava Havla. (<https://archive.vaclavhavel-library.org/Bibliography#12441>)

矢田部：会議「希望の未来」のオープニングにおけるヴァーツラフ・ハヴェル・チェコ共和国大統領のスピーチ

に置きかえるか悩む場面が多くあった。翻訳上の不備は訳者の力量にあり、読者の批判的検証を待ちたい。

(付記)

なお、ヴァーツラフ・ハヴェル・ライブラリーは、2013年から「ハヴェルのベンチ」プロジェクトに取り組んでいる。これはハヴェルが反体制派時代に盗聴の効かない庭に置かれたテーブルと椅子に腰掛けながら、自由や民主主義のための仲間との熟議を好んだことに由来し、チェコのみならず、世界各地の公共空間や大学キャンパスなどに「ベンチ」を設置していく芸術プロジェクトである。2021年秋、その「ハヴェルのベンチ」が本学に設置される。広島はハヴェルの業績の上でも大切な場所であるという事実が、本学が本邦初の「ベンチ」設置場所に選ばれた背景にある、ということを付記しておきたい。

また、訳出にあたっては、立古ダニエラ氏（東京外国語大学非常勤講師、チェコ語）のチェックを受けた。ご多忙のなか、数度のオンライン打合せにお付き合いいただいた。心から感謝申し上げたい。